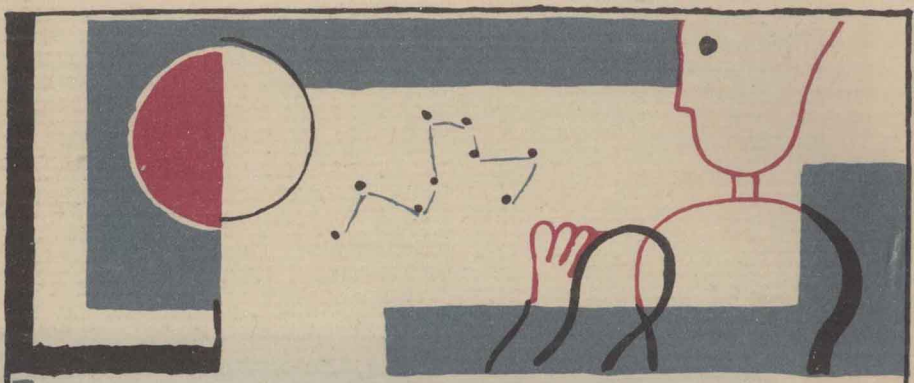

新興藝術派叢書

花の梅とけふ夜

井伏鱒二著

新潮社出版

夜ふけと梅の花

井伏鱒二著

新興藝術派叢書
新潮社出版

定價五拾錢
郵送料六錢

夜ふけと梅の花

昭和五年四月一日印刷
昭和五年四月三日發行

著作者　井伏鱒二
發行者　佐藤義亮
東京市牛込區矢來町
發行所　新潮社
電話牛込　長八八八八八〇〇〇〇〇五番
八九八七六番番番番番
振替東京　一七四二番

東京小石川區西江戸川町　富士印刷株式會社印刷

名著複刻全集　近代文学館　昭和44年9月

目次

朽助のゐる谷間……三
炭鑛地帶病院……四一
山椒魚……五五
ジョセフと女子大學生……六五
埋憂記……八〇
休憩時間……一〇六
シグレ島叙景……一一八
鯉……一四一
生きたいといふ……一四九

岬の風景……一四
遲い訪問……一七
寒山拾得……一九
うちあはせ……二〇
夜ふけと梅の花……二二
屋根の上のサワン……二〇
一ぴきの蜜蜂……二九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

夜ふけと梅の花

井伏鱒二

朽助のゐる谷間

谷本朽助（本年七十七歳）は實に頑固に私を贔屓してゐる。私がいかに遠い旅先へ行つてゐる時でも、彼は毎年、秋になつて口から吐く息が白い蒸氣となつて見える時節になると、私に松茸やしめぢを送つてくれる。うどん箱に苔を敷いて、凋びた茸類を一ぱいつめこんで、箱の表には必ず「オータム吉日」と記してある慣はしである。

彼はそれ等の茸類の發生する山の番人である。その山は、すでに私の祖父の時代に他人へ賣却したものであるにもかゝはらず、彼は頑迷に昔からの習慣を守つてゐるのである。

私は言ひ忘れないうちに、彼と私との交友を披露しておきたい。

私達兄妹三人は幼い時、兄、私、妹、といふ順序に、同じ乳母車で育てられた。この乳母車は、ハワイの出稼ぎから歸つて來た朽助の贈りものであつて、子守として私達を乳母車に乘せて遊ばしてくれたのも朽助なのである。

乳母車の幌には外國語で四行の詩が縫ひとりされてゐたが、その詩の意味は「眠れ、眠れ、幼な兒よ

眠れ。夕陽は彼方に入りそめた」といふのださうであつた。けれど乳母車に乘つてゐる時には少しも眠りたいなぞと思はなかつたので、私はその外國語の歌を好まなかつた。

朽助は乳母車に私を乘せて、終日庭の木立を縫うて行きつ戻りつした。それ故、泉水の周圍と木犀の木の下とには、雨が降つても消えないくらゐ轍の跡が殘つた。彼の目には常にものもらひが出來てゐて、實にのろのろと車を押したばかりでなく、彼は屢々立ちどまつて帶をしめなほす癖があつた。しかし私は乳母車の進行が中止することを好まなかつたので、幾度となく彼と口論をした。

「朽助！　早う行きし戻りししてくれといふたら」

「いま帶をしめなほしてゐるんですがな。そんなに言ひなさるな」

「廣大なことを言ふなといふたら。帶なんかどうでもよいがな」

私が彼をあまり急きたてるためらしく、朽助は幾度となく帶をしめなほしたが、常にだらしなく結んだのである。

乳母車のシーツをめくると、クッションには黑い色の蝙蝠が幾十匹も描いてあつた。蝙蝠達は夕方になると空に翼ひあがつて、私はクッションの蝙蝠が逃げてしまつたのだと信じた。

「朽助！　また蝙蝠が逃げた。早うあれを捕へてくれといふたら」

「默つて靜かにしてゐなされば、明日の朝になると戻つて來ますがな。心配しなさるな」

「是ッ非、戻るか？」
「是ッ非ですがな。したれど、もう一べん行きし戻りしますぞな」
「目をつむつてゐると、後へ走つて行くやうな氣がする。朽助らも乘せてみたらうか？」
「つがもない！　私らはあとで獨り乘つてみますがな」
朽助は乳母車を抑しながら、時としては私に外國語を教へようとした。
「木犀の木や松の木のことはツリーといひますぞな」
私はツリーといふ言葉を直ぐ忘れた。彼は私が忘れる度に、
「物覺えの惡い子供はアイズルですがな」
といつて叱つた。アイズルとは英語の Idle のことなのである。
私は乳母車を妹にゆづつた。すでに私は尋常一年生になつたのである。そして私は日曜日ごとに、朽助の家へ英語を習ひに通ふことになつた。彼の家は谷底の一軒屋で、おそらく彼はハワイで農業のことを學んでゐなかつたため、山番をするよりほかに能がなかつたものであらう。ところが彼は、私の個人教師としては頗る嚴格であつた。彼は私の祖父からもらつた袴をはいて、それは机の傍を離れて立ち上るとひきずるほど長いものであつたが、彼はしかつめらしく坐つて、私にリーダーの二の卷を讀んでくれた。そして私が少しでも傍目することを許しはしなかつた。私も袴をはかされてゐたのであるが、

私は膝の上に兩手を置いて、彼の譯述して行く言葉を諳記することにこゝろがけた。

「闇は深かりし。將軍は決死の部下を率ひてボートに乘りし。岸の柳は將軍の肩にふれ、柳の枝からは夜露が滴りし。艫の音は極めて微かなりし。將軍は暗き流れを眺め、且つ靜かに口誦みて、いくさに出かける人の如くにはあらざりし」

彼が譯述を終ると私は、

「闇は深かりし。將軍はボートに……」

「將軍は決死の……ですがな」

「將軍は決死の……」

「部下を率ひて……ですがな」

「部下を率ひて……」

さういふ具合であつたので、私は誤譯することをまぬかれたわけである。

授業が終つて私が歸る時には、朽助は必ず次のやうな注意を私に與へた。

「橋の上を渡る時に、橋の上に立ちどまつて川をのぞいてはなりませぬぞ」

彼の注意する場所には、谷川の流れが淀んでゐて、青い水が渦を卷いてゐた。その渦の上には、巨大な合歡の木が枝や葉をさしのべて桃色の綿毛を持つた花を盛んに散らした。桃色の花は渦卷く水面に浮

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

んで、赤いクレヨンの繪を速かに描いて消えた。

こんな追憶めいた記錄――これはすでに二十年以前のことなのである。そして今は最早、私は東京に住んで不遇な文學青年の暮しをしてゐる。それ故、私は朽助に對して、現在の私が何ういふ職業を營んでゐるかをさへも、明らさまに彼には告げてゐないのである。この事は彼の最も不平とするところであるらしい。

私が田舍の家へ歸る毎に、彼は私を訪ねて來て、何よりも先に私の職業を質問するのである。私はそれに對して常に答へをしないので、彼は私のことを時によつては齒科醫であると推定したり、時によつては技師であると推定したりする。そして歸りには彼は必ず私の近所の家へ寄つて、私が東京で技師をしてゐるとか齒科醫をしてゐるとか吹聽してまはり、わがことのやうに自慢して行く慣はしである。

しかし私は彼のおせつかいを嘲笑するものではない――私は彼のたつた一人の敎へ子である。二十年前、リーダーの三の卷が終了した時、彼は敎へ子に對して次のやうに語つたのである。

「若しあんたが立身せなんだら、私らはいつそつらいでがす。そんなめに逢ふほどならば、私らはなんぼうにもつらいでがす」

私はそのとき激しく感動して、そして歸らうと思つて外に出ると、いつの間に降りだしたのか雪が、谷底にも峰にも一ぱい降り積もつてゐた。

私は知つてゐる。若し私が、最近の彼の推定は誤つてゐて私は東京で辯護士をしてゐるのではないといふことを彼に告白したならば、彼は狼狽と絶望とを込めて言ふであらう。

「私らはなんぼうにもつらいでがす！」

そして胸に手を置き悲嘆に沈むであらう。

私は彼の面前ではあくまでも少壯辯護士を裝つてゐなくてはなるまい。

タエトといふ少女のことについて、私は幾らか言ひ遲れた。私は彼女のことはあまり知つてゐない。また彼女には一度も會つたことがない。幸ひ彼女からよこした手紙をこゝに發表する必要があるので、その文面から彼女の經歷をもくみとることにしよう。

「益々御健勝のことゝ拜察申しあげます。私どもの方では祖父朽助ども無事にて働いてをります。さて一昨年以來、毎日々々池の工事が續いてまゐりまして、今日では漸く堤防も出來上りました。大きな堤防であります。山と山との間の谷をせきとめたのでございます。水がたまると周囲二里半の池になる由であります。それで私どもの家は立ちのかなくてはならないのでございます。池は日本政府が許可し命令してつくつてゐるのであります故、私どもは立ち退きに反對することを許されないのですけれど、祖父は如何なることがあつても立ちのかないと反對いたします。しかし池が出來上つて水

が池にたまつてしまへば、私どもの家は水の底の一ばん深いところに沈んでしまひませう。常々祖父の噂をうかゞひまして、辯護士の要職におゐでになるあなたにお願ひいたしますれば、祖父も立ち退く決心をいたしますかと思ひます。どうか御手紙にて祖父を說き伏せて下さい。先日も當地から出られた代議士の人が參られまして、今度の選擧のとき自分の名譽にも關することであるから、横ぐるまを押さないで立ち退いてくれと申されました。祖父の申しますには、選擧民を買收しようとたくらんで池をつくつて(中略)と申します。この前の選擧の時にも、赤と白とのだんだら染めの棒を持つて測量師を派遣して測量さしたりして、やれ鐵道を敷設してやるのだと演說されましたが、今では沙汰がございません。祖父はそのことを今更申し立てまして、人々を困らせます。祖父が若し氣まぐれから(中略)を申しますのならば、私は(中略)を輕蔑する氣持ちから敗けるやうに思はれます。私は私自身のことを申し上げなければなりません。私は一昨年ハワイから祖父の家に參りました。名前はタエトと申します。說明申し上げますならば、祖父(日本人)と祖母(日本人)との仲に出來ました私の母(日本人)と私の父(アメリカ人)との仲に私が生れたのでございます。先年父はハワイで母や私から無斷で故國アメリカへ歸りましたので、私はアメリカ人のやうな姿ですけれど、やはり日本人でございます。さうして一昨年十二月、私は母に連れられましてこゝに參りました。その時は谷や山の木が枯れてゐて、私は寒さや淋しさに弱りました。母は姿も顏も人種的にも日本人で、また貯金もしてゐまし

たので、こゝに參ると直ぐに再緣いたしました。けれど氣候の變化が原因でせうか、二箇月目になくなりました。私は日本人としての教育をうけましたので、日本はハワイよりもいゝところだと思つて母と一しよに參りました。日本は私の祖國でございます。私は日本人の心を眞似て、この谷間で暮すのがいゝのだと思つてをります(後略)」

――私はこの手紙から想像して、そして考へた。朽助はとんでもない口達者な異人娘を背負ひ込んだものである。おそらく彼は彼女にやりこめられて、森に行つて腕組ばかりしてゐることであらう。彼は何故、私にタエトのことや池のことを言つてよこさなかつたのであらう。私は早速にも出かけて行つて彼の利權擁護のために運動してやらなくてはなるまい、場合によつては、縣廳まで出かけて行つても述べなくてはなるまい――私は出發した。

月明りの夜、深い谷底を歩くことは、これは樂しいものである。路は工事に必要からであらうが、新しく運んだ土で幅廣くされ、土の上には荷車の輪が深く刻まれてゐた。そして繁茂した松柏類の枝や葉は、明るみの斑點を路に描いた。私は屢々立ちどまつて淵の水面にうつつてゐる歪な月を眺めたり、ステッキで蔓草の花をたゝき落したりした。しかし私の樂しい行程は意外に短かつた。谷を挾んでゐる山と山とにまたがつて、巨大な城壁に似た石垣が築造されてゐたからである。池の堤防なのであらう。

私は堤防の基礎から私の立ちどまつた場所までの距離を目算して、さうして堤防の頂上を上目でにらんだ私の視線の角度を意識に入れ、この石垣の高さは三百尺餘りであることを知つた。この堤防の支へるであらう池の水底に、朽助の家が沈むのである。私は石垣の根元を歩きまはつて、堤防の内側に入るべき箇所をさがした。たつた一つの樋が見つかつたが、そこからは谷川の水が流れ出て、すさまじい水音をたてる瀧をつくつてゐた。瀧は自らの力で淵をつくつてゐるのである。この流れや樋は、池の工事が終ると同時に閉ぢられてしまふべきものに違ひない。何處かに排水用の大きな樋がなくてはなるまい——私はそれを捜した。そして約そ三十分間も捜した後で、石垣の腹ではなくて岩山の腹に、大きなトンネルがあるのを發見することができた。

私はマッチを連續的にすりながらトンネルのなかに入つて行つた。冷しい風が吹きぬけた。省線のガードくらゐの幅と高さである。岩山の臺地を弓なりにゑぐりぬいてあつて、天井からは水がしたゝり、岩の窪みには蝙蝠の幼兒が住んでゐた。

トンネルを通りぬけると、朽助の家の窓が見えた。灯りがついてゐて、杏の木と葉との半面を照してゐるのである。私は朽助と劇的な對面をしたくなかつたので、遠くから彼を大きな聲で呼んだ。

「朽助！　まだ寢てはゐないのか？」

翌朝、私は牛の啼きごゑや鎌をとぐ音によつて目をさました。そして小さな十字架を眺めたが、再び目を閉ぢた。十字架は枕の横の壁にかゝつてゐたのである。

朽助は窓の外で薪を割りはじめたが、彼は屢々障子を細めにあけて、私にたづねた。

「どしんどしんと音が響いて、さぞや眠れんでせうがな？」

私は、響きはしないと答へたり、假令響いても平氣であると言つたりした。

薪を割る音が終ると、今度は木立の枝を激しくゆする音がはじまつた。それはざわざわといふ音なのである。つゞいて地面におびたゞしい杏の實が落ちて來る音がした。私は寢床から起き上りながら叫んだ。

「朽助！　青い實も落ちてしまふぞ！」

「平氣ですがな。もそつと落してやれ」

彼は再び枝をゆすりはじめた。窓を明けてみると、朽助は杏の木に登つて、そして枝にまたがり、自分の體の重みを前後に動かしながら、杏の木に對しては痛々しいまでに枝をゆさぶつてゐたのである。地面は箒の跡がつくほど掃除されてゐたが、とび散つた杏の果實と青葉とによつて、一面に新鮮な塵芥だらけになつた。そして碎けた果實から發散する香ひは、朝の空氣に酸味ある色彩をもたらした。

私は窓に腰をかけて莨をふかした。谷間は、すでに池の底となるべく工事されつくしてゐて、赤土の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com